
ある中学校の吹奏楽部 ~ チューバ ~

葉月ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある中学校の吹奏楽部〜チューバ〜

【Nコード】

N3045C

【作者名】

葉月ちゃん

【あらすじ】

吹奏楽部のチューバの男子と女子の恋のお話。

第1話 予感（前書き）

実在する中学校の吹奏楽部の話です。名前は出てきませんが。

第1話 予感

世の中でヨン様フィーバーの嵐が吹き荒れているころ。

あるS中学校では冬の間の音づくりに励んでいた。

さて、吹奏楽で一番重要なパート、低音の中でも特に重要なチューバを

吹いている、男子と女子の話です。

女)「あゝのさあ」

男)「はあ」

女)「音程全然合わないんだけど」

男)「そら自分が悪いからでしょ」

女)「え〜、だって20セントも低いんだよ〜、マジありえんし〜」

男)「管入れた?」

女)「ぎりまで入れてる」

男)「じゃあー、後は気合と根性と口の形で合わせる」

女)「ふつー口の形から言っつでしょ」

男)「あー、ん〜、ドンマイ」

女)「そういつ問題?」

男)「って、漫才やってる場合じゃない!!!合奏だった〜」

女)「ひゃ〜、忘れてた〜」

すっかり忘れて部長にこっぴどりしぼられた後、片付けをしていたとき、

女子は改めて同じパートの男子をまじまじと見つめてみた。

端正な顔立ちで、ちょっと笑っているように見える。

学年の女子の6分の1が憧れているというコイツ。

自分に限ってそんなことは無いだろうと思っている。

実際同じパート内で付き合っているコ達もいるし。

関西から引越して来たと言うコイツ。

時々関西弁になって、吹部のみんなを笑わせているムードメーカー。

そしてどうやら自分の事を『友達』と思っているアイツ。

ちょっとお笑いコンビめいてると言われる。

所詮お笑いコンビはお笑いコンビ止まり。

友達は友達止まり、と諦めて音楽室に鞆を取りに行った。

女)「ねえ、アイツってどう思う?」

友)「ん、かつこいいけどどつかぬけてるっていうか、ピュッ
なんだよね」

女)「だよね、一緒に練習してて居ること自体忘れるもん」

友)「あつ、それ分かる分かるーいつの間にか後ろにいてビックリ
した

事がある!」

そんな事を喋りながら友達と帰った。

第1話 予感（後書き）

あと第二部と第三部を書きたいと思っています。気長に待っていてください。・・・ぼちぼち書きます。

第2話 後輩

世のオバちゃん達の興味がヨン様からハンカチ王子に変わっていったころ。

アイツに変化が見られた。

友)「やっぱさく、それってアイツのコト好きってことじゃない？」

女)「まーそうと言ったらそーだけど、違うといったら違うし・・・」

友)「どっちやねん!!」

女)「でも一方的な恋はちよつと・・・」

友)「でもアイツ見るたびちよつとドキッてるって事はそーなんじゃないの?」

女)「向こうはあたしの事をどう思ってるか分かんないし・・・」

友)「そんなんあたって砕ける!!って言うか語尾に・・・つきまくり」

女)「そらすんません。一緒のパートだから恋愛対象として見てないでしょ」

友)「一緒のパートだから良い所もいっぱい見てるら」

女)「あんたどこの人よ」

友)「そらすんません」

女)「でも逆に悪い所もいっぱい見てるでしょ」

友)「ネガティブに考えなさんな、ポジティブに行こうやないか！
」！

そうは言ってもこれがポジティブに考えれるわけないじゃんか！！

そんなこんなで新入生の入る季節になった。

男)「チューバいつも希望者いねーんだよな」

女)「ユーフォにはいるのにね」

男)「希望から落ちてなら来るんだけどな」

女)「そういうのって可哀そう」

男)「だよなあ」

そのとき、

後)「あの一、希望して来たんですけど」

！！！！ 待ってましたあ！

両)「どーぞどーぞ」

後)「えーとお、何をすればいいのですかあ？」

女)「まずマウスピースを吹いてみて」

なんかこのコかわいいかも。

後輩が帰った後、二人でちよつと話してみた。

女)「なんかあのコかわいくない？」

男)「ぜってーチューバに入る顔じゃない」

女)「顔とかで決まるの〜？」

男)「あんまり意味は無い」

女)「おいおい。ん〜、あんたに憧れて入ったとか」

男)「オレってそんなにイケメン？」

女)「んな訳ないじゃん！」

男)「なーんだ、つまらん」

女)「あの子なんかぶりっ子っぽい」

男)「だよな〜、あ、明日俺休む」

女)「えーなんで？」

男)「用事」

ちえっ、つまんないの。

で、次の日

後)「先ばーい、アレ？ もう一人の先輩はどうしたんですか？」

女)「用事だつてさ」

後)「・・・ちっ、来るんじゃない」

女)「へっ？何言ってるの？」

後)「おまえ、言うんじゃないぞ」

女)「は？」

後)「言ったらどうなるか分かってんだろっなあ、え？」

ああ、誰かそんなこと言ってたね。

後輩の親父は暴走族の幹部だつて。

・・・って、じゃあこの状況ヤバくない？

女)「・・・はい、分かってます」

後「じゃあ練習しましょうか、先輩」

うわーメチャ笑顔怖いよ怖いよ

どじすんのよアタシ、どじすんの？

第3話 厄介なヤツ

世のオバちゃん達の注目の的、ハンカチ王子が米の松井秀樹に会いに行ったところ。

前回後輩に脅されまくったあたしは毎日友達と喋っていた。

女)「後輩に脅されている先輩ってレアだよ」

友)「めっちゃレアだよ、つーか脅す後輩もレアだけどね」

女)「あれからよく観察してたんだけど、やっぱりあいつぶりっ子だわ」

友)「やっぱり?！」

女)「ヤツはすっかり信用してる」

友)「あゝあ、じゃチューバやってんだ」

女)「出来ないと思ったんだけど・・・」

出来てるんですね、これが。

友)「以外、そういうのって出来ないのが多いんだけどそいつは出来てるんだ。」

よっぽど気合入ってるんだね」

女)「出来てないと困るんだけど・・・」

出来ててもなんかムカつくんだよね〜。

友)「そういうのって分かる、フルートもそうだもん」

女)「とりあえずもう時間だから教室帰るわ」

案の定、教室では後輩がヤツにべったりだった。

・・・おえっ、気持ち悪っ

後)「ねえ〜、今度の日曜日にとっか遊びに行かない?」

男)「んー、日曜日は塾だ」

女)「ねーもうちょっとで1時だよ。そろそろ練習始めないとやばいよ」

男)「そーだな、オニの金管部長に怒られたらマズイもんな」

かくしてアイツのデート勧誘作戦は失敗に終わった。

ざまーみる

練習中そればかり思い出してニヤニヤしていた。

傍から見たらメツチャキモかったと思う。

ヤツとは帰る方向が一緒なので、一緒に帰ることにしてるけど最近後輩まで付いてくるので

嫌になっている。

後)「先輩の誕生日はいつですかあ？」

男)「オレは5月28日」

女)「アタシは12月26日」

後)「クリスマスの1日遅れですね」

女)「だから思いつきりクリスマスの物ばかりなんだよね、手袋とかマフラーとか」

男)「俺ここで帰るわ、じゃな」

女)「うん、じゃーねー」

後)「さよならあ〜」

はあ〜、やっと帰った〜。

あとはこいつだけ。

後)「……ちょっとどういいうつもり!? 昼間もアタシの邪魔してさ、なんなのあんだ」

女)「だって後輩に騙される先輩なんてかっこ悪いから助けてあげたんじゃん、なんか

文句ある？」

よく言えた、すごいぞあたし。

後)「余計なお世話です、つーか誰もあなたに助けてもらいたくないと思う」

女)「ですよね、誰もあなたに手助けしなくてもちゃんとアイツとくつつけるって

思ってるでしょ、現実はその甘くないよ」

……大人の魅力？

後)「なぐりをオバハン臭い事言ってんだか、とりあえずあたしは勝手にやるよ」

女)「あっそ、勝手にすれば」

とは言いつつもなんか不安だな、よし！見張ろう。

第4話 二つ中最も重要です!!!

後輩がアイツに告るらしい。

そんな噂が流れ始めた。

友)「奴を後輩なんぞに取られちゃってもいいの?!」

女)「よくない」

友)「じゃあ自分をアピールしな!!!」

女)「だって自信ないもん」

実際告るなんて恥ずいじゃん!!!

そんなある日、

準備室であいつがポケットとしてた。

女)「どしたの? 間抜けな顔して」

男)「告られた」

女)「!!! 誰に?」

男)「後輩に」

女)「……あの可愛い子?」

男)「そう」

……アタシに打ち明けるって事は、つまり恋愛対象として見てないって事!?

女)「誰だったら良かったの?」

男)「言う訳ねーじゃん」

女)「だよな」

男)「それより、個人・パート練どうする? ユーフォと合わせる?」

女)「何を? ブルースカイ?」

男)「いや、ロック」

女)「はいはい」

アイツはあたしの事をどう思ってたんだろう?

そればかり気になって授業に力が入らない

ま、キライって事は無いだろうからがんばってみよう

放課後の音楽準備室で男女がなにやら深刻な話をしていた。

男)「あの話だけど、ごめん無理」

後)「……なんで！他の人にそう言えって言われたの？」

男)「いや、俺好きな人いるし…あんまり君みたいな子はタイプじゃないんだ。これは

自分の意思だ」

後)「……好きな人って誰？」

男)「お前に言ったらそいつイジメられそうだから言わない」

彼女は『何で分かったの！！？』みたいな顔をしていた。

男)「…凶星だな、じゃあこれで」

そついうと夜風のようにすいーっと帰っていった。

………幽霊か！！

かっこつけすぎだし

翌日、後輩がフラれたという噂が流れた。

友)「よかったじゃん！しかも好きな子いるからだって！！」

女)「その好きな子がアタシの可能性は20%も無いよ……トホホ」

友)「トホホなんてちび　る子みたいな言い方はやめて」

女)「だいたい1話でも言ったけど、同じパートだから絶対恋愛対象としてみてないよ」

友)「そういえば言ってたね」

またまた放課後の準備室。

あたしは片付けがまだだったので準備室に行ったらすでに先客がいた。

あいつだ。

男)「なんだ、まだ片付けしてなかったんだ」

女)「うんまあ」

ちょうどマウスピースをケースに入れてたとき、

男)「俺の好きな奴って知ってるか？」

あたしは片眉をちょっと吊り上げて、

女)「あんたが口堅いから知るわけないじゃん」

と言った。

男)「まあそうなんだけど」

女)「自分で認めてるし」

男)「実はさあ」

奴はひどくゆっくりと言った。

男)「俺の好きな奴って」

微妙に変わってきた空気にちょっと戸惑いつつも奴の言葉を聴いた。

男)「お前なんだけど」

………つて、ちょっと待った〜!!!

女)「え〜〜〜〜!!!」

男)「声デカイ!」

女)「ゴメツ、えーでも嘘でしょ、普通に考えて」

男)「しょうがないじゃん、好きになったもんは変えられないんだから」

女)「まあそうなんだけど………だって今まで同じパート内の同期って事で考えてたのに」

イキナリ彼氏とは考えられないでしょ」

男)「まあそうなんだけど、君の気持ちはどうなんだ?」

女)「アタシも…好きだよ、好きだけど………」

あー…も…分かんない!!!…!!!

女)「よくわかんなくなっちゃった」

男)「俺もよくわかんなくなった」

女)「取り合えず帰って考える、振ったりはしないから」

男)「振られないように祈るよ」

とは言ったものの、やっぱり彼氏とは考えにくいなあ、望んでた事なのに。

あ、そうだメールして聞いてみよう。

to メグ

今日奴から告られちゃった!!!

で、

今更だけども、どうしよう!!!?

助言をお願いしやす!

from 奴から告られた者

まあこれで返事待っただけ

第5話 文化祭 その1 (前書き)

ん〜と。やっと2人の名前が出てきます。
いや〜、長かった〜。

第5話 文化祭 その1

夏も終わり、文化祭の季節が来た。

文化祭といってもほんのささやかな物だが。

肝心の吹奏楽部は曲練に余念が無かった。

前回告白されてから調子が狂いつぱなしの私は簡単な所でミスり後輩に散々笑われた。

あれから彼とは目を合わせれない。

友)「あんなド簡単なところで間違えるなんて1年生でもないよ」

女)「それ言わんとして、気が滅入る……」

友)「ハ ポタやりたいつて言ったのはあんだだからね、当の本人が……」

女)「ストップ、分かりました、ハイ」

練習してても意識するなんて今までは無かったのに……と、思いながら文化祭の

1週間前。

もう大筋の練習は終わっていて、後はみんなのタイミングを合わせる為の合奏で

吹いている途中、物凄い頭痛が襲ってきた。(ん)、ありがちなネ
タ)

最初に気付いたのは彼だった。

男)「……………！おいっ！大丈夫か？しっかりしろ！」

女)「い……………痛いよお……………っっ！」

周りの人)「先生！！せーんーせーい！！」

先生)「何？どうし……………」

その先を聞く前に意識は闇の中へ埋没して行った……………

∴

∴

∴

∴

∴

⋮ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮

…

んゝあつたかゝい

なんかきもちいいゝ

やわらかゝい

(どっかで聞いた……?)

真っ白で

って

女)「こじこじ?」

?)「保健室ですよ」

女)「うわぁ!!…ってなんだ先生か、びっくりした……」

先生)「うわあ!!とはなんですか!!あと1時間は動いてはいけないですよ」

女)「え〜、つまんない」

そう言つて先生は見回りに行つた。

女)「……………ほんとにつまんない〜、誰か来てくれないかな〜」

男)「やつほー!」

女)「うわあ!!」

男)「うわあ!!とはなんだ!せつかく来てやつたのに」

女)「わーごめんごめん、あ、来てくれてありがとう」

男)「ついでかい!!」

女)「だってびっくりしたんだもん」

男)「……………可愛い」

女)「は?何言つて……………きや」

ぎゅーって抱きしめられた。

女)「ちょっと……………恥ずかしい。やめてよママサキ……………」

マサキ)「だって雫が可愛いからツイ……………」

雫)「でも……………先生戻ってくるかも」

2人は先生が戻ってくる直前まで抱き合っていました。

第5話 文化祭 その1（後書き）

どうも。葉月です。久し振りになった『ある中学校の吹奏楽部』チユーバ』をやつと書き終えました。

やつぱ連載3つも持つてるとキツイです。そっちの方もよろしく！
みたいな。あ、遅くなつてすみません。

第6話 文化祭 その2

結局のところ付き合う事になったマサキと栗は、ラブラブスウィー
トな気分で

文化祭を迎えたのでした。

しかーし！

マサキ達が付き合っている事を知らない部員達は2人の突然の仲の
良さに驚いている。

文化祭 当日 AM7:00

「マサキおっはよー！」

「おはよ、朝からハイテンションでいいな」

「ちょっと早過ぎたね、駅誰もいない……逆に寂しい」

「そうだな……電車来るまで何人人が来るか賭けしないか？」

「いいね！あたしは……10人」

「じゃ、俺15人で」

「あたしが勝ったらマサキはキスしてくれる？」

「いいよ、俺が勝ったら俺のチューバ様をトラックに入れといて」

「はいはい」

……スーツ姿のサラリーマンっぽい人が来た。

「1人目」

……誰もいなかった駅員室に駅員が来た。

「2人目」

……女学生3人が連れ立って喋りながら来た。

「5人目」

……大学生らしい人がギターを肩に引っ掛けながら来た。

「6人目」

電車が到着するまであと5分。

ぼろぼろの身なりをした人が来た。

「7人目」

……同じ学校の吹部のクラ（クラリネットの略）の1年生が3人来た。

「10人目」

あと1分。

「もう来るな、もう来るな……………」

電車到着間際、高校生らしき男子が階段を駆け上がってきた。

「11人目」

電車に乗ってから、

「あーあ、賭けはなしかー、つまんないの」

「でも俺キスしたいな」

「あとで!!!」

そんなこんなで文化祭会場。
案の定、早過ぎて開いてなかった。

「なんだ、もう一本遅く来ればよかった」

「開館7:30だった」

……………

「今キスしようって思ったでしょ」

「なっ、何で分かったの〜?」

「ふっふっふ…マサキの事ならお見通しだ！！なーんてね」

雰囲気雰囲気と笑った。

現在時刻、7:28

「2分ぐらい早く開けばいいのに」

「だよなー」

「あ、トラック」

「先にいてよかったな、2年いないからな」

2人はドアが開いたと共に、舞台裏での楽器積み下ろしに向かった。

「チツ、パーカス誰かいりゃいいのに。ベル組み立てれないじゃないか」

「だよな」

そんな事を話しながら楽器を降ろした。

そして自分の席に鞆を置いて音出しをしに、リハ室に行った。やっぱり誰もいなかった。

「さっき駅にいた1年生どこに行ったのかな？」

「さあ〜？」

誰もいないことをいいことにわざわざ鏡の前でマサキは鞆に抱きついた。

「きゃっ、ちょっとマサキ！なんでわざわざ鏡の前で……やっ」

耳に息がかかっただけでちょっと叫ぶ雫。

「いいだろ、少しくらい」

キュッ、キュッ

廊下に靴音が響く。

「誰か来る」

そう言ったきりマサキは練習に戻った。

そして1年生が入って来た時は、ちょっと耳が赤い雫と、なんでもないような顔をした

マサキが隅っこで並んで吹いていた。

第7話 文化祭 その3 (前書き)

多分次かその次ぐらいで最終話になると思います。
初の連載物でしたが読んでくれた人が居ればありがたいです。

第7話 文化祭 その3

音出しを終えた2人はそれぞれの合唱練習に向かった。

それから文化祭は着実に進み、昼休み。

この中学校はホルンとサクソスがうまい。と、言うことで、

1カ月前、

「今度の文化祭はハリ タトル ン三世と、ブルースカイで」

と言うことになった。

でも、チューバって速いテンポで16部音符とか無理だから!!

何でルパ 三世って16部音符有り過ぎだから!ちよつとどころじやないほどムリ!!

タイとかシンコペーションありまくり……………テンションも下がるから〜。

ハリポ はまあチューバってカンジだからいいけど…………

そんなこんなでもう本番。

1番目は パン三世

もうみんなノリノリで最っ高!!

サクスのソロかつくい〜

でも、

チューバがないと、浮いててかつこわるいもんね。

2番目は リポタ

ホルンの音ってちょっと小さいから、前に出てマイクでその美しい音色を響かせてる。

あーなんかイギリス行きたくなってきた。

フルートのメロディーも素敵。

シメのブルースカイはもう十八番。

でも気を抜かないように、テンポどおりに吹いた。

もう会場は割れんばかりの拍手。

これこそ吹部の醍醐味だね。

「アンコール、アンコール！」

出ました、毎年恒例のアルコール、じゃなかったアンコール。

アンコールにお答えしまして、4番目はベストフレンド。

すっごいしつとりとした曲で私のお気に。

チューバはメロディーは無いけど、しつかりサポート役。

またアンコールがあったけど、もう曲が無いので終わりになった。

どの組の合唱より、吹奏楽部の演奏の方がずっとうまかった。

(と、自分では思っている)

その片付けは1年生の使命。

と、言う訳でヨロシクー。

後輩に嫌味を言ってゆっゆくと帰る。

もちろんマサキと一緒にね。

「夜の電車の中は、まるで世界が電車の中だけになったみたいで好き」

「確かに…でも僕の方がもっと好き」

「くっさーい、分かってるから。私もマサキが好きだよ」

そんな風にふざけながら電車に揺られるのが心地よかった。

ずっと乗っててもいい……

そういう時こそ、時間が早く感じられるもの。

あつと言つ間に駅に着いてしまった。

「じゃあまた明日」

どちらからとも無く言い出すと、もう一方が、

「もうちょっとだけ」

と言つて引き止める。

考えあぐねたマサキが、

「キスしたら帰つてもいい？」

「いいよ」

目をきゅつと瞑つた雫が感じたのは柔らかい感触とミントガムの味だった。

2人のファーストキスは、ちよつぱり寂しい別れ際のキスだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3045c/>

ある中学校の吹奏楽部～チューバ～

2010年10月9日03時43分発行